人形土器の新資料

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫻井, 秀雄, Sakurai, Hideo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00050687

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

金沢大学考古学紀要 39　2018，　37-43.

人形土器の新資料

櫻井　秀雄
（長野県埋蔵文化財センター）

１　はじめに

弥生時代の顔面造形のひとつである人形土器について、私はこれまでに『金大考古 73 号』に「弥生時代の人形土器」（櫻井 2013）を、また本紀要 36 号に「人形土器の研究」（櫻井 2015）を発表してきた。特に後者においては、管見の限りではあるが人形土器の集成を行い、若干の考察を行った。

前稿を執筆後、人形土器が出土した長野県佐久市内の３つの遺跡について調査報告書が刊行されたため、今回は、補遺としてその資料を紹介し、集成に加えるとともに、若干の考察を行いたいと思う。

２　人形土器について

人形土器の定義や分類などについては本紀要 36 号で論じているが、ここで改めてまとめてみたい。

弥生時代の顔面造形には、土偶形容器や人面付土器などもある。土偶形容器は再葬墓の蔵骨器であり、弥前期から中期前半頃にみられる。土偶形容器がみられなくなるのに代わって、中期前半頃には人面付土器が出現する。この人面付土器には中期後半頃に姿を消す類型（人面付土器 A）と、これと入れ替わるように中期後半頃に出現する人面付土器の類型（人面付土器 B）の 2 者がみられる。後者の類型（人面付土器 B）は、人面に細沈線などの装飾を施して鯨面とおぼしき表現をとるそれまでのものとは異なり、人面に装飾的な文様がなく、鼻筋の通った顔立ちのものであり、より立体的でもある。また人面付土器 A が再葬墓の蔵骨器としての機能をもつのに対し、人面付土器 B には蔵骨器の機能はなくなっていることも指摘できる。

そのため、この二つの類型を同じ「人面付土器」という呼称で表現するのは、その性格を理解する上でそぐわないのではないかと私は考えており、より立体的な表現を呈する後者の類型を「人形土器」として理解するものである。

また、この人形土器についても、鼻筋が通ったすっきりとした表情を呈する、橋本裕行氏がいうところの「やさしい顔」（橋本 1997）をしたものと、鼻や口などの顔面を誇張表現し、異形な様相を示す 2 種類がみられるため、私は、前者を「人形土器 A 類」、後者を「人形土器 B 類」として分類している。

旧稿で集成したところによれば、人形土器 A 類は、神奈川県横浜市の上台遺跡例、神奈川県横須賀市のひる畑遺跡例、静岡県有東遺跡例、それに長野県佐久市の西一里塚遺跡 No2 例及び西一本柳遺跡２例、中佐都小学校所蔵品例の５遺跡・１所蔵資料を数える。人形土器 B 類は、群馬県渋川市の有馬遺跡例と有馬条里遺跡例、高崎市の小八木志志貝戸遺跡、吾妻郡中之条町の川端遺跡例、利根郡川湯村の個人所蔵資料、長野県佐久市の西一里塚遺跡群 No1 例、長野市の松原遺跡例と榎田遺跡例、千曲市の八王子山 B 遺跡例、松本市の百瀬遺跡例と９遺跡・1 所蔵資料が認められる。

３　大豆田遺跡Ⅳ出土の新資料

大豆田遺跡は佐久平北部地域の佐久市長土呂地籍に所在する。遺跡としては後述する西近津遺跡群と隣接する。これまでに 4 回の発掘調査が行われ、第 4 次調査において人形土器が出土した。第 4 次調査は、小学校の新設に先立ち行われたものであり、佐久市教育委員会では平成 23 年度に試掘調査を実施し、工事で破壊される範囲については平成 24 年度に佐久市教育委員会により発掘調査が実施された。そしてそれ以外については埋土で保存することになった。

報告書は平成 27 年 3 月に刊行された（佐久市教育委員会 2015）。発見された遺構は、弥生時代、奈良時代、平安時代、中世にわたる住居跡 26 軒、竪穴状遺構 3 棟、掘建柱建物跡 33 軒、土坑 139 基、溝状遺構 76 条、遺物集中区 10 ヶ所であり、注目される遺物には、今回とりあげる人形土器の他、古代の複弁八葉軒丸瓦等がある。地形的にみると、佐久平北部地域に特徴的な田

切台地先端から低地へとつづく南傾斜地に遺跡は展開しており、今回は、弥生・古代・中世を中心とする集落の一部分を調査したことになる。

人形土器は、試掘調査時に発見されたものであり、埋土で保存されることとなった地区にあたる。なお、報告書では、「人面土器」として報告されている。

この人形土器は､顔面の左半分のみの残存であるが、口の形状は穴で表現していると思われる。顔面は赤彩を施すが、額から鼻筋部分のみ無彩としている。目、耳、鼻、口、頭部に穿孔があり、耳は貫通している。所産時期については、今回の調査区には弥生中期の遺構が発見されていないことから、報告者の冨沢一明氏は弥生後期の範疇でとらえている。残存部の法量は、縦 9.1cm、横 7.4cm、厚さ 6.0cm をはかる。

４　東一本柳遺跡Ⅱ出土の新資料

東一本柳遺跡は佐久市岩村田地籍に所在し、千曲川に流下する湯川右岸の台地上に展開する。本遺跡及び周辺遺跡は弥生時代中期から中世の大複合遺跡であり、各時代の集落跡や墓域等がみつかっている。周辺遺跡には西一本柳遺跡、五里田遺跡、北西の久保遺跡、北一本柳遺跡、東大門遺跡などがある。佐久市教育委員会が実施した２次調査は、市営住宅団地建設に伴うものであり、平成 21 ～ 23 年度に行われた。報告書は平成 26 年（2014 年）に刊行されている。

調査区は A 地区、B 地区に分かれ、A 地区では弥生時代後期の環濠と思われる溝跡､古墳時代の住居跡、中世の遺構が、そして B 地区では古墳時代中期～後期の住居跡６軒、掘建柱建物跡３棟、中近世と考えられる多数の竪穴状遺構などが発見されている。

人形土器は、A 地区から出土した。遺構外出土であるが、２点が発見された。

１はカクランからの出土で、人形土器の腕が剥離した肩～胴部にあたる部分とみられる。２はトレンチからの出土であるが、環濠とみられる M2 号溝跡の確認面にあたる箇所となる。人形土器は、人指し指と小指を欠く右腕部分で、外側･内側ともに赤彩されている。残存部の法量は１が最大径 6.3 ㎝、最大幅 3.5 ㎝、最

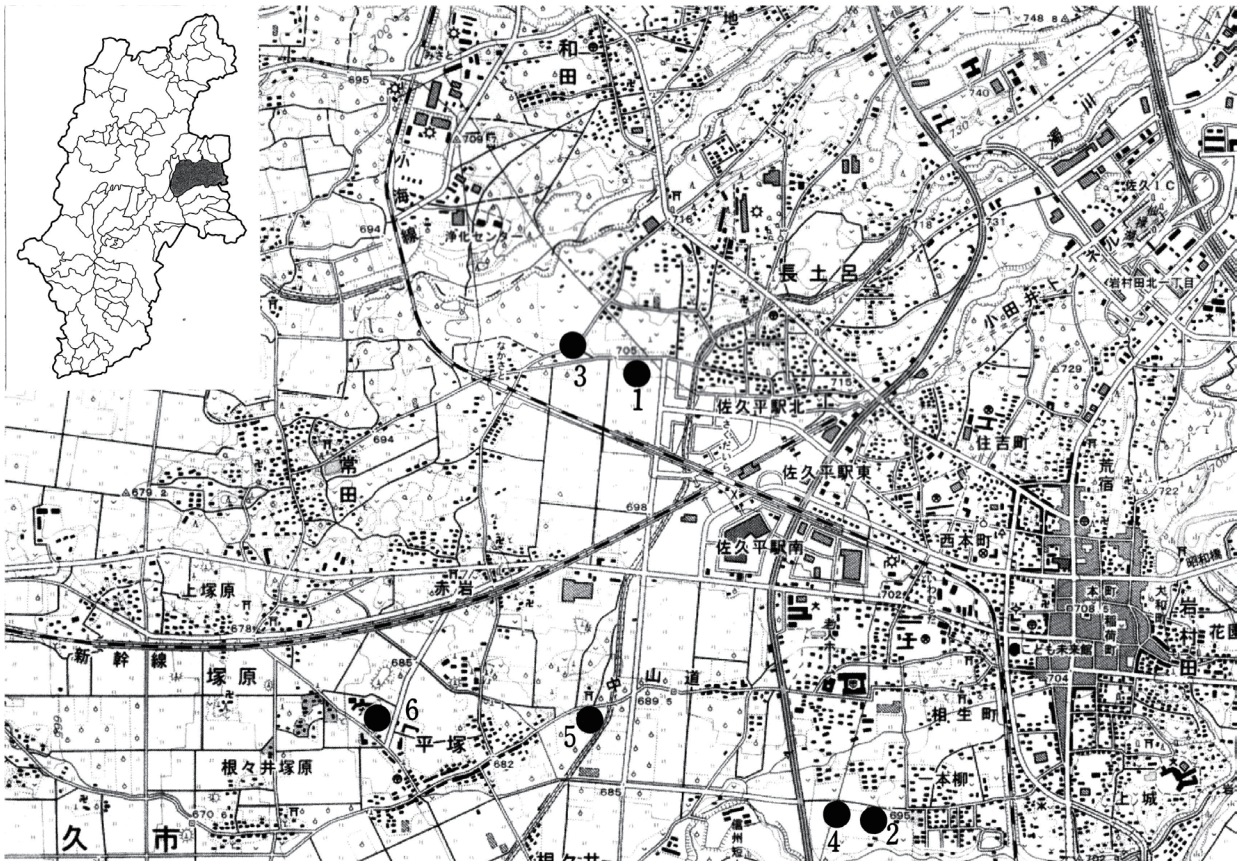


図１　長野県佐久市の人形土器出土遺跡
１　大豆田遺跡Ⅳ　２　東一本柳遺跡　３　西近津遺跡群
４　西一本柳遺跡　５　西一里塚遺跡群　６　中佐都小学校所蔵品

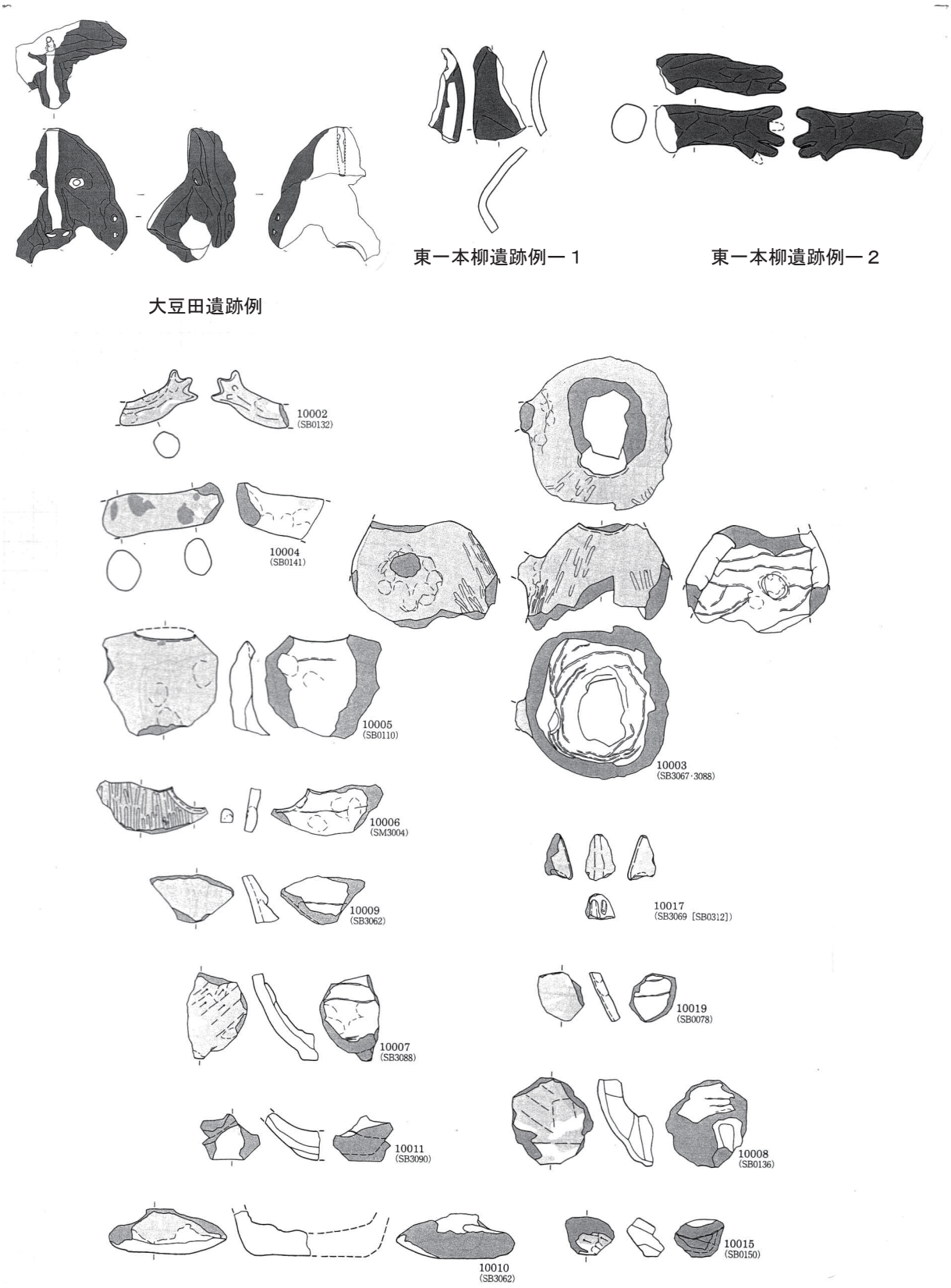


図２　人形土器の新資料（縮尺１／４）

大厚 0.7 ㎝であり、２が最大径 8.6 ㎝、最大幅 3.6 ㎝、最大厚 2.7 ㎝をはかる。また、同じく遺構外からは中央の穿孔が貫通している陽形土製品が出土しているが、これは２と胎土や赤彩が酷似するという。人形土器の一部である可能性もあろうか。いずれも後期に位置づけられよう。

５　西近津遺跡群出土の新資料

西近津遺跡群は、佐久市長土呂・常田地籍に所在する。遺跡群のひろがりは、東西約 1.8 キロ、南北約 0.8 キロで範囲は約 55 万㎡に及んでいる。これまでに佐久市教育委員会による発掘調査が十数回行われてきているが、平成 18 ～ 20 年度まで行った中部横断自動車道建設に先立つ長野県埋蔵文化財センターの発掘調査では、縄文時代から中世の大集落跡が姿をあらわした。なかでも弥生時代と古代が主体であり、弥生時代では竪穴住居跡 110 軒、円形・方形周溝墓 19 軒などが、また古墳時代から平安時代の古代には竪穴住居跡 432 軒、掘立柱建物跡 122 軒などが発見された。弥生時代後期の集落は佐久地方最大の規模をはかる。特に全長 18.1 ｍ及び 13.6 ｍの超大型竪穴住居跡２軒の存在は注目される。報告書は平成 27 年（2015 年）3 月に刊行された。

人形土器は 18 点が出土した。すべて破片資料であるが、胴部 14 点、腕 2 点、頭部の鼻 1 点、底部 1 点である。接合されたものはないが、報告者は少なくとも 6 個体以上が製作または利用されたものと推測されている。このうち、報告書には13点が掲載されている。すべてが竪穴住居跡の覆土からの出土である。

10003 は胴体部で最も残りのよい部位であり、胴部上半部で全周する。残存高 6 cm、胴部最大径 8.6cm をはかる。腹側が大きく膨らみ、背側は直立気味で、肩は張らず、中心より背側にずれた位置に左右の腕がつく。腕は欠損するが、右腕基部の状況から斜め上方に腕を広げている状況が読みとれる。腹側の上部には幅 2cm ほどの穴があいている。上部が欠損しているため穴の全体形状は不明であるが、残存する下部はゆがんだ弧状を呈し、端部がごくわずか外側に張り出している。開口部は腕より上にある。

10005 も 10003 と同規模の胴部破片で、よく似た開口部（下部）をもつ。10006 も胴部小破片で、上記 2 例よりもやや下がった位置に、丸みのある開口部がみられる。

10002 は小ぶりな右腕部の破片で先端が平らに加工され手指が 3 本つく。10004 は大ぶりな右腕部で、先端はやや平らに加工されているが、手指部は欠損する。

このような指の表現は、東一本柳遺跡例 -2 や群馬県の有馬遺跡例、佐久市の西一里塚遺跡群例にもあり、人形土器 B 類の特徴のひとつとして指摘することができると考えられる。

10017 は頭部の鼻が剥落した破片である。鼻筋が明瞭で先端は欠けるが二つの鼻孔が確認できる。鼻孔は貫通していない。

10010 は底部とみられる。平底でやや丸みをもって胴部につながる。この他、1007 ～ 1009、1011、10016、10019 は胴部の破片である。

６　人形土器の分布

今回新たに紹介した 3 遺跡での事例はすべて弥生時代後期に位置付けられ、人形土器 B 類に分類できると考える。これで人形土器 B 類の出土は、12 遺跡・1 所蔵資料となる。

B 類については、これまでも群馬県と長野県にしか認められていなかったが、追加された資料も長野県佐久市の 3 遺跡であるため、群馬県で 4 遺跡･1 所蔵資料、長野県で 8 遺跡をみることになった。長野県と群馬県に特徴的なものと理解してよいであろう。

なお新聞報道によれば、高崎市教育委員会が平成 28 年に調査した若田坂上遺跡で人形土器の頭部が弥生時代後期の礫床墓から 2 点出土したという（2016 年 6 月 10 日付高崎新聞）。新聞掲載の写真をみるとＢ型とみてよいと思われるので出土遺跡数にはさらにもう 1 遺跡・2 点の事例が加わることとなる。

長野県内でも B 類の佐久地域での出土が 4 遺跡と半数を占めており、A 類（２遺跡・１所蔵資料）を含めれば、人形土器の出土が佐久地域に集中していることがわかる。

新資料を加えてみても、B 類は佐久地域から群馬県の高崎市・渋川市周辺に分布の中心があることが指摘できよう。

また、佐久地域のなかでも佐久平北部の佐久市長土呂・平塚地籍から岩村田地籍にかけての約 2.5 ㎞の範囲に人形土器の出土地は集中しているのである（図１）。ここは、佐久地域における弥生時代の遺跡集中

地帯にあたるが、人形土器の分布が極めて濃厚であるといってよいだろう。

7　人形土器の出土場所と機能

人形土器の出土場所については、旧稿では①竪穴住居跡からの出土、②墓域からの出土、③その他・出土地不明の３つに分類できるとした。そして、竪穴住居跡からの出土もすべてが覆土中からの発見であり、廃棄されたものとみてよいと思われる。その他の遺構から出土する事例についても溝跡からの出土が主であり、竪穴住居跡での事例と同様に廃棄されたものとみることができよう。遺構外出土のものも墓域もしくは墓域に近い箇所からの出土である事例がみられるため、墓域で使用されることが人形土器の基本的な機能であり、竪穴住居跡や溝跡は廃棄された場所であったと考えたのである。

今回紹介した３遺跡についてみると、大豆田遺跡例は試掘調査で終了し、保存された地区であるため詳細は不明だが、西近津遺跡群例ではすべてが竪穴住居跡からの出土であり、東一本柳遺跡例は溝跡の確認面で発見されたものであるが、この周囲には墓域がひろがっている。なお若田坂上遺跡例も礫床墓からということである。いずれも上記の分類に該当する。そして、人形土器の機能が、墓域で使用されることであることは新たな資料によっても首肯できよう。

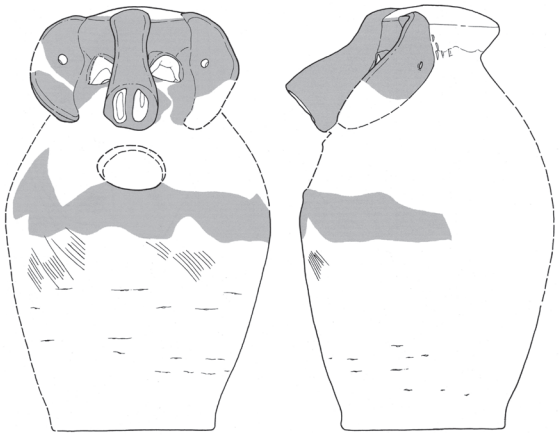
それでは墓域ではどのような役割を果たしたのであろうか。前述のとおり、墓域出土であっても土坑などに埋納されたものではなく、遺構外出土か竪穴住居跡や溝跡などに廃棄されたとみられるケースである。蔵骨器として使用されたものではないことを物語っている。墓域に置かれたものとみるべきである。

こうした出土状況を踏まえて、旧稿で私は、群馬県の有馬遺跡例や小八木志志貝戸遺跡例、それに長野県佐久市の西一里塚遺跡群 No1 例を代表とするＢ類に顕著となる顔面などの誇張表現から、墓もしくは墓域における「辟邪」の役割を果たしたものであると考えた次第である（図３・４）。

そして、Ｂ類で顕著になる人形土器の「辟邪」の機能について、旧稿では墓域を外から進入してくる外敵（悪霊など）から守ることとともに、一方では、死者の霊を墓及び墓域に封じ込めるということも重要な役割であったのではないかと指摘したが、ここで詳述したい。

私は、平成 29 年に「霊魂封じ込めの場としての古墳」

群馬県 有馬遺跡 例



群馬県 小八木志志貝戸遺跡 例

0　20cm

図３　有馬遺跡及び小八木志志貝戸遺跡出土の人形土器

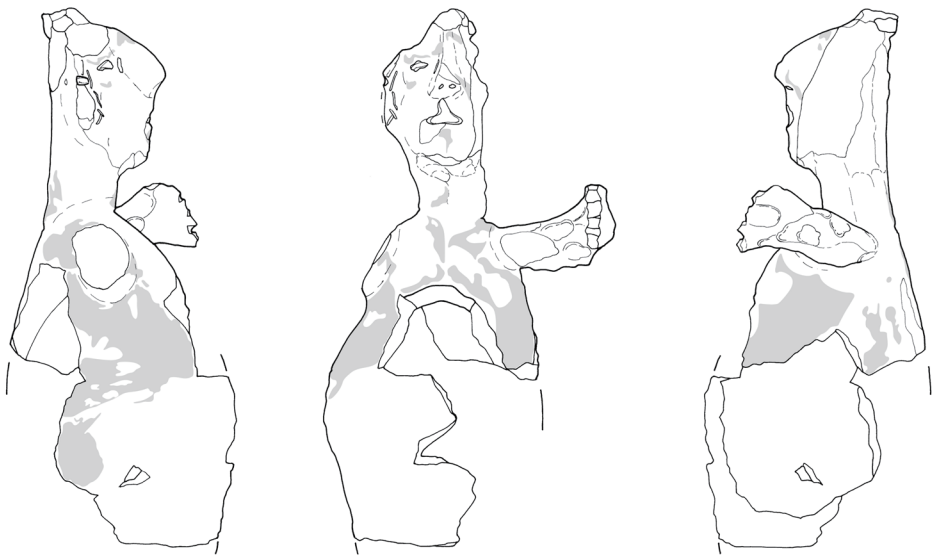


図 4　西一里塚遺跡群出土の人形土器 No1 例

と題する拙稿を草した（櫻井 2017）。これは、古墳における遺骸と霊魂の関係について検討し、とりわけ前中期古墳において遺骸を徹底的に保護したのは、遺骸とともにある霊魂を辟邪することが目的であったと論じたものである。そして古墳における辟邪は、外部からの悪霊から死者の霊魂を護るためであると同時に死者の霊魂そのものを封じ込める役割もあったことを指摘し、外部の悪霊を近づけないようにするのも、死者の霊魂そのものが荒々しいために外部の悪霊がとりつくとさらに恐ろしいものになってしまうことを防ぐ必要があったからであると論じた。

古墳築造の最大の目的は、荒ぶる死者の霊魂を「和魂」に昇華するべく行う鎮魂儀礼にあることにあり、古墳は霊魂を封じ込めるために造られたものなのである。そのため古墳は造ることが最大の目的であるため、継続的な祭祀を行うことはなかったわけである。ごく一部を除いて古墳の被葬者は誰なのかが不明であったり、また築造後それほど時間が経過しないうちにも破壊された古墳が存在したりするのも、古墳にはこのような本質的な機能が内包されているものだからである。

古墳における辟邪の機能は、石室の構造や鏡や腕輪型石製品の出土状況からも知ることができるが、埴輪についても本質的な機能は辟邪である。そのなかでも異形な様相を示す盾持人埴輪は古墳の外縁部に置かれ、その異形な様相で古墳と外界との辟邪を目的としたものである。この盾持人埴輪と人形土器との関連性を指摘したのが設楽博己氏である（設楽 2012・2017）[1]。私も設楽氏の見解に賛意を示すものであり、この点からも人形土器、とりわけ B 類については辟邪のために墓・墓域に配置されたものと理解することができると考えている。ただしそれは永続的に墓域に置かれたものではないことは、放置された例や破砕されて竪穴住居跡や溝跡などに廃棄された事例からうかがい知ることができる。今回の新資料はこうした人形土器の機能理解についても補完するものとなろう。

8　おわりに

以上、旧稿発表以後に、新たに報告書が刊行された３遺跡での事例を紹介し、改めて人形土器の機能・性格について論じてきた。この他にも群馬県高崎市の若田坂上遺跡でも人形土器の頭部が 2 点出土していることについても触れてきた。

墓・墓域における辟邪の役割を果たす人形土器は、長野県佐久地域から群馬県にその分布の中心があり、出現もこの地域からではないかと推測するものである[2]。

私は墓の機能には①遺体処理の一手段、②死者への哀悼の場、③死者および後継者たる生者の社会的地位の表明の場、④祟りを防ぎ、死者の霊魂を鎮撫する場（死者の霊魂封じ込めの場）という四つの側面があると考えており、時代により、どの側面に比重がかけられるかが異なるものとみている。古墳時代は③とともに④の機能の比重が大きい時代だと理解するが、弥生時代、特に後期には④の機能も重視されていることが人形土器の存在からわかるのである。

今後も人形土器については多方面からの検討を行っていきたいと考えている。

註

1）設楽氏は私がいうところの人形土器を人面付土器に含めてとらえている。私の人形土器 A 類は人面付土器 B、人形土器 B 類は人面付土器 C として分類している（設楽 2017）。私は本文で述べたとおり、人面付土器 B は蔵骨器としての機能はなくなっていることや、より立体的なつくりとなっていることを重視し、人形土器として呼称するのがふさわしいと考えている。

2）設楽氏は、群馬県域に人形土器の源流が求められることから盾持人埴輪の起源が弥生時代後期の群馬県域にあるということは軽率であるとするが、「盾持人埴輪と表現や意義を同じくする土製品が、弥生後期にさかのぼってこの地に認められるのは重要である。盾持人埴輪を生み出す母体は、すでに 2 世紀の日本列島にかなり広く存在していたと考えられる。」と論じている（設楽 2017）。

引用参考文献

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990『有馬遺跡Ⅱ』
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『小八木志志貝戸遺跡』
佐久市教育委員会 2014『東一本柳遺跡Ⅱ』
佐久市教育委員会 2015『大豆田遺跡Ⅳ』
櫻井秀雄 2013「弥生時代の人形土器」『金大考古 73 号』金沢大学考古学研究室
櫻井秀雄 2015「人形土器の研究」『金沢大学考古学紀要 36 号』金沢大学考古学研究室
櫻井秀雄 2017「霊魂封じ込めの場としての古墳」『信濃 69 巻 7 号』信濃史学会
設楽博己 2012「辟邪の思想」『佐久考古通信 No110』佐久考古学会
設楽博己・石川岳彦 2017『弥生時代人物造形品の研究』同成社
長野県埋蔵文化財センター 2012『濁り遺跡　久保田遺跡　西一里塚遺跡群』
長野県埋蔵文化財センター 2015『西近津遺跡群』
橋本裕行 1997「弥生人の顔」『考古学ジャーナル No416』

謝辞：中村慎一先生、中村誠一先生の還暦をお祝い申し上げます。

中村慎一先生が着任されたのは私が卒業してからのことですので、直接講義を受ける機会はありませんでしたが、金大考古学大会では私の発表に対していつも的確なコメントをいただくなどご指導を賜っております。なかでも平成 10 年の考古学大会で私が「石製模造品を用いた祭祀儀礼の復元研究」と題した発表を行った際には、祭祀研究における文献や民俗・民族事例の援用については、変化を語ることのできないこれらの資料の有効性と限界を十分に考慮しながら進めていくべきだとのご指摘をいただきました。これは考古学から祭祀・信仰研究を行っていく上で極めて重要なご指摘であり、以後、私の研究基軸となっています。

中村誠一先生は、私が研究室に在籍していた当時、中米のホンジュラスでマヤ考古学を精力的に研究している先輩がいらっしゃるとのことを貞末尭司先生と佐々木達夫先生からよくうかがっており、御高著は出版されるたびに拝読させていただいております。もう二十年近く前になりますが、地元の信濃毎日新聞書評欄の「この一冊」というコーナーで、私は『マヤ文明はなぜ滅んだか』をとりあげさせていただいたことがあります。サークルの後輩で金大東洋史研究室卒業の原田省子記者がまとめてくれたものですが、この場を借りてここに記事を掲載しておきます。

「この一冊」

「「海外の遺跡調査といえばエジプトが脚光を浴びていますが、中米のユカタン半島に栄えたマヤ文明の遺跡調査でも、最近は日本人研究者の活躍が目立っているんですよ」。発掘調査のプロが薦めるのは、中村誠一「マヤ文明はなぜ滅んだか？」（ニュートンプレス）。著者は 1983 年に青年海外協力隊の一員として現地での発掘調査に参加して以来、十数年にわたって地道な調査を積み重ねてきた若手研究者だ。マヤ文明の始まりから滅亡までを時代の流れに沿って解説しながら、マヤ文字の解読方法や暦の見方など、一般読者にも興味深いテーマを取り上げている。「マヤ文明関係の本は多いけど、この本は学術調査に基づいた最新の研究成果からマヤ文明滅亡のなぞに迫っている。入門書としても最適だと思います。」」

『信濃毎日新聞　平成 12 年（2000 年）5 月 28 日付朝刊』

お二人の先生方の益々のご活躍を祈念いたしております。